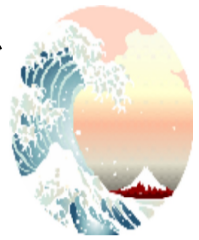


猿新聞

謹賀新年



ニホンジカ急増 個体数管理

先の通常国会で、石原伸晃前環境相は「減らすべき鳥獣に対する取り組みが不十分だった」と述べ、法律の名称自体を「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」に改め、生息数を適正規模に「管理」することを明記。

これにより現在261万頭いると推定されるニホンジカの個体数を、この先10年間で半減させるという方針を打ち出しています。

何故、ニホンジカは生息域を拡大し、個体数を増加させたのでしょうか。

明治時代から大正時代初期にかけて乱獲により全国的に激減し、ベテランの猟師でさえ奥山に分け入って、運が良ければ見つかることができた、といわれているほど少なかったのです。

国は、絶滅を危惧し明治中期から、狩猟規則を制定しニホンジカを保護の対象としてきました。戦後は「鳥獣保護及狩猟に関する法律」と改正を重ねながら政策として保護に努めてきました。

ニホンジカが深刻な社会問題になるまで増えたのは、天敵オカミの絶滅や暖冬、中山間地域の過疎化、高齢化による捕獲圧の低下等々複層的な要因が考えられますが、最も大きな原因は、短絡

編集・発行
山村 準
tel: 0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

頭。このペースでいくと、2025年度には500万頭に達します。

先の国会で、石原伸晃前環境相は「減らすべき鳥獣に対する取り組みが不十分だった」と述べていますが、遅きに失した感があります。

近年、大きな問題として取り上げられているのは、農林業・生活環境への被害は勿論、ニホンジカの食害による生態系被害が、南アルプスにまで及びお花畑が消滅寸前の状況で、そこに生息する雷鳥にも絶滅の危機がせまっています。

一方、鳥獣捕獲に中心的な役割を果たしてきた狩猟者が減少・高齢化しており、捕獲の担い手の育成や確保が課題となっています。捕獲制限が解除された今、高齢化等で狩猟者が減少しているのは皮肉なことです。

的な保護政策に起因していると考えられるべきではないでしょうか？

長期、保護政策の結果ニホンジカは、ここ20年間で、約9倍になったといわれています。

1989年度は推計30万頭。現在では推定261万頭。



捕獲圧の低下は個体数の増加や分布域の拡大に結びつきます。

ニホンジカの初産は2歳で、春に1頭を出産します。寿命はオスで10歳、メスで12歳、15歳といわれています。

ニホンジカは一夫多妻でオスは複数のメスと交尾するため、メスの生存率が生息数増加に大きな影響を持っています。生息数を適正規模に管理するにはメスの個体数管理が重要です。

古代から私たち人間とニホンジカとの関係は、獲る、獲られる。強食弱肉の関係であったと思えます。ニホンジカによる被害を軽減するためには、自然の恵みとしてその命を無駄にすることなく、ありがたく頂戴するといった取り組みも必要ではないでしょうか？

そもそも生態系のバランス破壊や無責任な開発を推進してきた私達人間です。その反省を込めて野生動物の棲みやすい、本来の原生林の植生を復活させるような取り組みを始める必要があります。

(写真上シカによる山林被害 赤目町龍神山で平成24年8月撮影)

名張猟友会 女性猟師参画

環境省の発表によると、昭和50年度には51万8千人いた狩猟人口は平成22年度には19万人にまで減少している。このうち60歳以上が12万2千人で、



フル装備の北野さん

く暖かい場所や餌が簡単に入手できるような特定の場所を中心とした生活になります。

集落内に多数存在する夏みかんやユズの実は、餌になりやすいため、早い時期に収穫するか、防護ネットで覆いましょう。

指南員報告

12月のサルの動向

AB群それぞれの遊動域をおおむね全域を遊動していますが、食餌資源の状況によっては、同一集落に数日滞在する場合があります。

家庭菜園での獣害対策の程度、果樹の残存程度、水田の未耕うん地の稲のひこばえの残存等により、集落間で出没頻度と被害に差が出ています。

編集局便り

この1月号で103号となり、創刊以来足かけ9年。当時は猿害への危機感からの発行でした。

紙面を繰ると群れのサルから離れサル・シカ・イノシシと獣害対策の対象も変遷してきています。獣害対策は、地域全体で「根気よく色々な方法を試みる」事です。

今後とも獣害対策などの多彩な情報を報道しますので、応援よろしく！

サルの出没状況

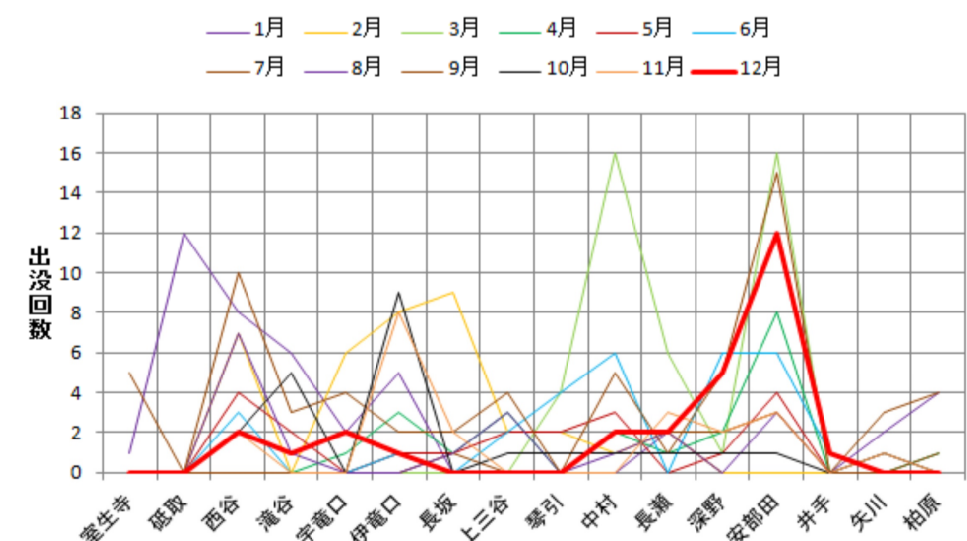
名張A・B群



サルには冬休みはありません。

冬から早春にかけて、山の餌が乏しくなるため、サルが他の季節より大胆に農地や集落に出没します。さらに、日

名張B群出没状況グラフ



名張A群出没状況グラフ

